

## 待降節第3主日 A年

第一朗読 イザヤ 35・1-6a、10

第二朗読 ヤコブ 5・7-10

福音朗読 マタイ 11・2-11

2025.12.14 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

今日、わたしたちは待降節第3主日のごミサをお捧げしています。祭服の色が今日はピンク色を用いています。待降節は普段は紫色ですけども、第3主日だけピンクを用いても良いということになっていますが、それは、まだクリスマスは来ていないけれども、もうすぐ近くに来ているっていう、そういう喜びを表すわけです。たとえば言うならば、日の出前の暗闇がだんだん明るくなっていく。まだお日様は完全にはその姿を現わしていないけれども、でも少しずつ空の色が変わっていく。その色を表しているというわけなんです。だから、「すでに主は近い、しかしまだだけど」って。来週はもう1回、「でもまだ到来していない」っていうその闇へと意識を向けますけども、今日わたしたちは、「しかし救いの業はすでに始まっているのだ」ということを特に意識する、そういうふうに招かれていると言っていると思うんです。

で、今日の福音の中では、洗礼者ヨハネ —— 救い主が間もなくいらっしゃるから準備するように、って人々に告げ知らせていた、その預言者、聖書の中で本当に尊敬されている登場人物の一人ですけども —— その洗礼者ヨハネが、イエス様になさっていることを見て、あれが本当に救い主なんだろうかって不安になる、そういうような場面だったんですね。

洗礼者ヨハネのような偉大な人であっても、神様のご計画を完全には理解することができないということの表れでもあるけれども、一つには、わたしたちの中に、やっぱり根深く先入観と言いましょうか、救い主が到来するならばすべての問題を一度に解決してくださるはずなんだっていう、そういう先入観も現れているように思います。

しかし、イエス様になさっているのは、一人ひとりの病いを癒し、一人ひとりから悪を追い出しっていう、イエス様お一人が一人ずつにそれをやっていたら神の国はい

つ到来するのかっていう心配なわけですが、イエス様が言いたいのは、神の国っていうのはいっぺんに、人間の<sup>がわ</sup>側の心が変わるってということとは関係なく一度に神様が全部の問題を解決することではないのだと、一人ひとりとイエス様が、またお互いが出会っていき、目の前の人を大切にするっていう、それを通して、多くのイエス様に会った人たちが自分の人生を取り戻して<sup>さま</sup>いっている様を、今日の福音書では象徴的に、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」っていう預言者の言葉を引用して表現されています。

これは、必ずしも肉体的ないろんな問題の解決や、あるいは経済的な問題の解決に留まらない。むしろ一人ひとりがイエス様に会って、そして希望を持って歩いていく、また他の人との係が良いものになっていくっていう、少しずつ少しずつ救いがイエス様に会った人たちの中に広がって<sup>い</sup>っているっていう様を象徴的に表しているというふうに理解することができるわけです。そして、そのイエス様の力が、今度はわたしたちの中にも働いて、わたしたちが会おう人々一人ひとりを大切にしようとするときに、イエス様の救いがだんだんに広がっていくと信じているのが、キリスト教の信者ということになるのではないかなと思います。

そういう意味では、本当に小さなこと —— 一見すると遠回りに見えるような、無関係に見えるような、でも小さなこと —— の中に神の国が広がっている。むしろ、人間をひと<sup>かたまり</sup>塊の群衆として扱うような全体のシステムとか制度とか、そういうようなことだけを見ているならば、そこに神の国の到来はないんだとさえ言ってもいいかもしれません。

一人ひとりに出会っていく、あるいは本当小さなことでも、今日いろんな街で、いろんな今日だけ会おうお店の人とか —— 特に身近な家族とか友人だけではなくても —— に対して、わたしたちの側がありがたそうな態度を取るとか、あるいはほほえむとか、そういうことだけでも、それをしないよりはした方が、その分だけこの世の中は良いものになっていると言ってもいいのではないかなと思います。神の国の広がりはその積み重ねなんだということを、わたしたちはいつも思い起こしたいんです。

「教会の将来が、、、」っていうことを論じる。だけど、子どもたちが居て、声を出したりしますよね。でもそういう子どもたちを「うるさいなあ」って言うておきながら教会の将来は論じられません。むしろ、そういう一人ひとりを大切に喜んで受け入れることは、そのときだけのことではない。遠回りのように思うけれども、それがなくて将来にこの聖堂に人が集まり続けるだろうかっていうような、そのことは本当に何か違う価値観に身を委ねてしまいます。

わたしたちが会える具体的な一人ひとりとの関係の中で、小さなこと、またわたしたち自身も、会えるいろんな人からの小さな態度や色々な優しさを通して支えられているということを見落としているならば、改めてそれを思い起こす機会でもあるかもしれません。

わたしたちの中に働き、そして少しずつ少しずつ、会える一人ひとりに呼びかけるっていう神の業への信頼を思い起こしながら、本当にその小さな出来事、ちょっとした態度の中に、神の国の発展につながるかあるいはそれを壊してしまうか、そういう種が潜んでいるのだということをいつも思い起こしながら、わたしたちが、今日、まだ到来していない、イエス様をお祝いするクリスマスはまだだけど、しかし確実にその喜びは広がっていつているのだと——それはまさにこの世における神の国の有様を表していると言ってもいいかもしれないんですけども——そういう希望のうちに、一人ひとりがイエス様の力を頂いて、身近なところで、そして具体的な誰かに対する行いの中で神の国に繋がる者となっていきますように、導きとそして恵みを願ひ続けたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>